医療タイムス

週刊医療界レポート

2016.5/2・9 合併号 No.2254

特集 市民公開シンポジウム

がん哲学外来
～純度の高い専門性と丁寧な大局観～

タイムスインタビュー

見事なロケーションも治療法の1つに
全ての疾患の終末期を診るという覚悟

医療法人伊豆七海会
熱海 海の見える病院 院長
鈴木和浩氏

タイムスレポート

第9回在宅介護事情調査

要介護者の40%が低栄養傾向に

74%の家族は低栄養の意味を知らない!?

Top News

JMATに歯科医師が参加 日歯

ノロウイルス感染拡大、トイレ断水原因か 熊本地震

見事なロケーションも治療法の1つに 全ての疾患の終末期を診るという覚悟

鈴木和浩氏

医療法人伊豆七海会
熱海 海の見える病院　院長

静岡県熱海市の相模湾、熱海市街地を一望する高台に４月１日、「熱海 海の見える病院」がオープンした。心臓血管外科医として“生かす医療”に尽力してきた院長の鈴木和浩氏は、同院では“死と向き合う医療”を考える。その覚悟を聞いた。

取材●田川丈二郎

人間の尊厳を持って最期のときを過ごす

――4月1日に、新しくオープンをしました。

「静岡県熱海市の高台に、この4月1日、オープンしました。一般病床40床、療養病床72床の計112床の比較的に小さな病院ですが、腎臓、腫瘍、透析を含む内科、さらにはリハビリテーション科を標榜しています」

――病院の特徴はどこにありますか。

「まず第1に挙げられるのが、圧倒的な景観だと思います。高台の上に所在する6階建ての病院ですので、眺望も本当に素晴らしく、竣工式に来賓として来られた熱海市長も、眼下に広がる熱海の街並みをご覧になり、大変、驚かれていました。

事実、海に向かってせり出していく山々には、季節ごとに梅や桜などが咲き薫りますし、ときとして雲海が中腹に広がり、天空の城を思い出させてくれます。一望できる相模湾も、日中は水平線まで群青色の海が広がって、それがだんだん夕景に染まり、夜には水面に月が映るという具合に美しさが移り変ります。それに加え、熱海市の名物である花火大会も、病室から楽しめます。海を含めた見事なロケーションで入院できる病院というのは、なかなかないと思います」

――どういう効果を期待していますか。

「病室に面会に来られた皆さんにも『このロケーションなら、長く入院しても大丈夫だ』と言っていただけるなど、患者さまのご家族の満足度が高いことが挙げられます。また患者さまご自身も、当初はベッドに寝たきりだったのが、景色をご覧になりたいという思いから起き上がるようになり、さらに、より近くの窓辺で眺めたいと歩かれるようになるなど、眺望がリハビリテーションのモチベーションになるのでは、と期待しているのです。“ロケーション療法”という言葉があるのか分かりませんが、この眺望自体が治療法の1つになるのではないでしょうか」

――医療の機能としてはどうですか。

「同じ伊豆七海会が運営する熱海所記念病院（以下、所記念病院）は、熱海市内で急性期医療と回復期医療を担っておりますが、当院としてはそこで担いきれない、療養期の医療提供や人工透析などの機能を果たしていくことを目指しています。例えば、透析施設を持たない所記念病院では透析治療が必要な場合、他院への紹介となるため、結果として患者さまを手放すことになっていましたが、透析室に15床の専用病床を有する当院では、最大で1日60人を受け入れることができます。また、熱海に観光に来られる方を対象とする“旅行透析”の受け入れも今後、進めてまいります。もちろん、療養期に必要なリハビリテーションにも力を入れていきます」

――院長としてどのような病院にしたいですか。

「当院の使命は、ひと言でいえば、『全ての疾患の終末期を診る』ことです。終末期といえば、がん末期であるとか、入院透析が必要であるとか、さらには肺疾患、心疾患、呼吸器疾患などに罹患されているケースもあります。最終的には医療が介入していく必要があり、療養病床に来られる患者さまも多いわけです。こうした中、『最期に医療として手を差しのべる』と言ったらおこがましいですが、きちんと最期まで診ていきたいと思います。

一般病床では化学療法も行います。近隣の大学病院が行うような“抗がん”という意味ではなく、それらの病院での治療では治癒が見込めなくなり、行き場のなくなった患者さまを積極的に受け入れていきます。所記念病院のような急性期病院では、なかなか受け入れづらかったような患者さまですね」

――最終的には、在宅や施設に帰っていただくことになりますか。

「そのまま病院で最期を迎えるか、ご自宅などへ帰っていただくかはケースバイケースだと思います。最期をどう迎えるかは、ご家族の希望や、患者さまご本人の人生観によるところが大きくなります。自宅に戻られることを希望される場合は、周辺の介護基盤や在宅医の存在も大切になりますので、綿密に連携を図りながら対

応していきます。もちろん、一般病床に入院後、そのまま療養病床に移動していただき看取ることも可能です。柔軟な対応を考えています」

――患者の入口は、やはり所記念病院ですか。

「そうですね。患者さまの紹介元は、所記念病院が全体の５割程度になると思います。例えば経管栄養が外れない患者さまや社会的な事情でご家族がみられない患者さまなどは、療養型の病院へ移っていくことになるわけですが、それが当院ということになります。もちろん所記念病院以外でも、近隣医療機関との連携をさらに深め、紹介患者さまを増やしていこうとしています。先に挙げた、悪性疾患で終末期に近づいている患者さまの受け入れ先になるような医療機関は近郊には存在しませんので、そうした患者さまのご紹介を依頼しているところです。所記念病院でも"顔の見える連携"に努めてきましたが、引き続き、地域の医療機関の皆さんと信頼関係を築いていきたいと思います」

――療養病床に賭ける思いを。

「私はもともと心臓血管外科医ですが、それこそ心肺停止しても『どうあってもいいから生かす』という現場に携わる中、『医療はどこまで介入すればいいのか』を、ずっと考えてきました。その後所記念病院に赴任し、患者さまの最期の迎え方には、医師のひと言が大きく影響することを実感しました。患者さまとご家族にきちんと向き合い、判断の手助けをしていくことが私の責務だと感じています。

『終末期にリハビリは必要なのか』と疑問に思ったこともありますが、人間として尊厳を持って最期のときを過ごすことは、本当に大切なことだと思います。納得した最期を迎えてもらうことは、医療としての最後の使命です。現代の高度先端医療では、救命という意味では確かに救える命も増えていますが、人生の最期の過ごし方、迎え方までは面倒をみてくれません。私はそこに手を差しのべていきたいと思います」

Profile

◆すずき・かずひろ氏（54歳）

1989年昭和大学医学部卒。同年、昭和大学藤が丘病院外科に入職。91年以降、国立循環器病センター心臓外科、昭和大学藤が丘病院胸部心臓血管外科を経て、2001年医療法人横浜柏堤会戸塚共立第２病院循環器内科。04年、医療法人社団伊豆七海会熱海所記念病院副院長。16年４月より現職。

コンビを組む石井道栄看護部長(左)とともに

熱海 海の見える病院

ドライブ　「熱海 海の見える病院」の院長に就任する際、病院名に合わせて車を赤からオーシャンブルー仕様に替えた。「天井など内装もブルーで、海の中にいる気分になる」。これからは愛車と共に趣味のドライブを満喫していきたい。